西日本新聞
2008年（平成20年）5月22日 木曜日
43857号（日刊）
©西日本新聞社 2008年

黒田 福美（くろだ ふくみ） 女優

◆慰霊碑撤去 無念だが、日韓交流手応えも

私は韓国の研究者らと協力して、太平洋戦争で日本人として犠牲になった朝鮮人らを慰霊する「帰郷祈念碑」を韓国南部の泗川市に建てた。ところが地元の一部団体から反対が強まり、今月10日に予定していた除幕式が前日になって中止に追いこまれたうえ、石碑は13日夕、市によって撤去されてしまった。

日本が民族の名前を奪った過ちを踏まえ、さまよえる魂の故国への帰還を日本人と韓国人が共に祈ることに、反対などないと思っていただけに、今回の結果は無念でならない。

たしかに私が石碑建立を思い立ったのは、日本軍の特攻隊員として24歳で戦死した朝鮮人の卓庚鉉さんのことを知ったからだ。朝鮮人特攻兵は韓国では売国奴のように思われているが、実は家族や祖国を思いつつも戦争に巻き込まれていった時代の犠牲者なのだ。

そして、石碑の趣旨はあくまで、創氏改名によって日本名のまま葬られ世界各地に散らばる霊魂が故国へ帰郷することを願うとともに、太平洋戦争での泗川市および韓国全土の犠牲者を悼むというものだった。

だが、反対派の左派系市議や、独立運動家の子孫らでつくる光復会は、「市の協力は市長の独断であり議会の承認を得ていない」「日本からの正式な謝罪のないままこのような石碑が建つことは疑問」「靖国にまつられた人物の名を刻んだ石碑など到底許せない」と主張した。

それだけ聞くと、いまだ旧態依然とした反日感情が韓国を包んでいるように思われるかもしれない。しかし、実は決してそうではない。むしろ韓国側に多くの理解があったからこそ、除幕式一歩手前までこぎつけることができたと感じている。

石碑建立には多くの韓国人が好意的だった。朝鮮人特攻兵が祖国や家族を思いつつ非業の死をとげたことが韓国側に理解され同情を生んだからこそ、泗川市長は昨年9月、石碑の敷地を提供してくれたのだと思う。

石碑を制作したのは、韓国の高名な彫刻家だ。東亜日報、韓国日報などには好意的な記事が掲載され、韓国観光公社は「除幕式ツアー」を後押しする記者会見まで主催した。

私たちは、帰郷祈念碑は第一段階であり、最終的には沖縄の「平和の礎」のように戦争犠牲者の名前を一人一人刻銘した石碑群にしたいと考え、市長に提案していた。これを機に各地に同様の慰霊碑が建立されるのではないかという見方もあった。

石碑に理解を示していた市長が、なぜ除幕式直前になって態度を変えたのか。地元では「政戦に利用された可能性がある。反市長派が直前の中止で市長に打撃を与えようとした」との見方があるという。もしそうなら誠に心外だ。贖罪の気持ちを行動で表したいと除幕式参加のため訪韓していた善意の日本人30人を巻き添えにしたのだから。

ただ、反省もある。反対派とコミュニケーションが不足していた結果、「特攻兵の慰霊碑」という言葉が独り歩きしてしまい、私たちの趣旨が正しく伝わらなかった感がある。除幕式が中止になったあとも、碑文の修正を提案するなど、反対派と話し合うことで合意点を探せると感じていただけに、早々の撤去は残念だ。私有財産である石碑の無断撤去は容認できない。

もう一つ残念なのは、今回の件を韓国の中央メディアが全く報じていないことだ。日韓新時代の今こそ、これを題材に改めて歴史認識や民間交流のあり方について論じられたらと思う。